

點蝕現象を伴つてゐる事及時間的に見ると酸素の濃度高きもの程點蝕のスタートが遅れる事を知つた。

14) アルムコ鐵に於て酸素 8cc 前後の場合 Ph 6~7 では點蝕を起したが、炭酸の存在で 5~6 Ph 値に於ては酸化皮膜の面も出來ず從つて點蝕も認め得なかつた。

15) 保護皮膜のある面を算出して酸素と鐵の蝕損關係を圖表にすると、直線ではないが、蝕損は酸素の濃度に比例して多くなる事が分明した。

16) 以上諸實驗による測定又は觀察の結果より考察を試み、次の推定を下し得た。

即鐵及鋼が水中に於ける初期の受働狀態は、酸素の直接酸化による皮膜の生成であらうと云ふ事、點蝕は材料表面に於ける不均一な受働態の結果であると云ふ事。

不均一受働態の生成原因の主なるものは 2 つ考へられ、

其の 1 つは一度出來た受働態面の一部が水素により還元復極せられると云ふ事、其の 2 は酸素の不均一分布により部分的受働態を起すと云ふ事。

何れにせよ不均一受働態は流電作用を起し陽極面の蝕損を助長させるが、自然水中に於ては陰極面及受働態面にスケールを沈析する、之は流電作用の一證明になると云ふ事。

點蝕現象を供試材料に就て見る時は含銅鋼、アルムコ鐵共析炭素鋼及鑄鐵の順序になつて含銅鋼が最も甚しいが、之等の順序の出來た原因は酸素の直接酸化に關係してゐると云ふ事。

此の研究に當つて實驗の援助をせられた千葉喜美、蘆田春行及山田謙二郎君の勞を多とし此處に感謝の意を表す。
(昭和 8 年 1 月 31 日、満鐵、中試、沙研、化學冶金室)

電弧鎔接法による鎔着金屬の電磁氣的性質に就て

(日本鐵鋼會第 11 回講演大會講演)

岡 田 實*

ON THE ELECTROMAGNETIC PROPERTY OF THE DEPOSITED METAL IN ARC WELDING.

Minoru Okada.

SYNOPSIS:—In this experiment author used various type of commercial electrodes and special made electrodes which were added Silicon, Aluminum, Phosphorus and Manganese in the coating material. The deposited metal from these electrodes were tested to find the electromagnetic property, mechanical property and change of these properties before and after aging and annealing. The results of this investigation are as follow:

1. The electric resistivity of the deposited metal from the low carbon bare electrode was comparatively small. Therefore it is suitable to weld the electric circuit. But the mechanical quality of the weld metal deposited from the bare electrode was inferior to that deposited from the covered electrode.

2. In the case of the magnetic circuit welding the deposited metal must have high permeability, low hysteresis loss and high electric resistivity. For these purpose it was applicable to use the electrodes that were coated with the proper quantity of silicon and manganese. However manganese itself is not directly to afford the good effects to the magnetic property of the deposited metal but it reduces the contamination of air to the deposited metal.

3. The deposited metal from the phosphorus coated electrode was a little better than that from the bare electrode. It was, however, so brittle that was readily cracked by light hammering. The iron aluminum alloys were similarly to the iron phosphorus alloys except under the critical quantity of aluminum.

4. The deposited metal in arc welding possessed in general the conspicuous aging property. However it was so much improved that hysteresis loss increased with time as little as negligible if the electrode had coated with silicon and manganese.

5. The magnetic characteristics of the deposited metal were much affected by the cooling rate of the metal, especially, below 500°C.

6. The deposited metal from the manganese coated electrode developed the high tensile strength and that from the silicon coated electrode developed the high impact resistance. The deposited metal from the covered electrode with silicon and manganese had the superior mechanical properties.

7. Author indicated the microstructure of deposited metals from the various type of the coated electrode. In the presence of silicon, the grainsize was large. But if the manganese had been added to the electrode, grain-size of the deposited metal was fine. Up to the quantity of phosphorus reached 0.5% in deposited metal, author found the characteristic sharp needle structure in it.

8. The welded metal of the low carbon steel by the atomic hydrogen welding process possessed the good electromagnetic and mechanical properties. But it had a considerable aging effect in magnetic characteristics.

9. The silicon coated electrode was practically impossible to be deposited by the electric arc process on account of the large globule of the electrode dropped down. However the silicon and manganese coated electrode was possible to obtain the deposited metal with some difficulties.

* 大阪帝國大學工學部

緒 言

電弧鎔接法は作業が迅速容易にして接合の強度も鉄接以上に確保し得られ、且重量を大に軽減され得る故、材料に於て労銀に於て時間に於て幾多の利益がある。従つて最近各方面に應用普及し造船に橋梁に建築に機械構造に其の他あらゆる工業界に歓迎されてゐる。

電気工業に於ても日々其の利用に注目し既に電氣鐵道のレールの接合、電機の鎔接等相當發達してゐる。然し電弧鎔接法は實用時代に入つて日尙浅く鎔接部の電磁氣的性質に就ては未だあまり顧れず従つて其の研究發表も殆ど皆無の状態である。けれども凡そ電氣、磁氣回路の接合には必らず其の接合部の性質を吟味知悉する必要のあることは明である。米國鎔接協會では既に數年前に此の點に注目し電弧鎔接法による鎔着金屬の電磁氣的性質を鎔接に關する基本的研究問題として提案してゐる様である。

著者はこれとは全く關係なく研究を始めたのであつて先に大阪市地下鐵道の第三軌條の鎔接をした場合に其の電氣抵抗に及ぼす影響を見る爲に市場にある鎔接棒を以つて鎔着金屬を作り電氣抵抗を決定した。¹⁾ 繰いて磁氣抵抗に対する研究を進めたのであるが我が國でも現在或は近き將來に極めて重要な問題であると思ふ。

此等電氣回路或は磁氣回路の接合には接合部の電氣抵抗或は磁氣抵抗が小さくなることが必要で且つ使用中に變化の少いものでなければならぬ。一面接合と云ふ目的に應じ優秀な機械的性質を要する場合もあるゆへ此等の諸點を考慮して諸種の市場にある鎔接棒及び特種の元素を添加した試作鎔接棒を作りこれを鎔着して鎔着金屬の試験片を削成し電磁氣的性質及び機械的性質を研究し、更に時効、焼鈍による變化をも明かにし、顯微鏡組織と合せて冶金學的考察を加へたのである。

鎔着金屬の性質に影響する諸條件

鎔着金屬は鎔接棒が電弧の放電發熱作用を媒介として熔融或は氣化の状態を通つて鎔接鉢上に鎔着されるのであつて電解的及び電熱的條件としては電氣機械の特性、弧光電壓、鎔接電流、弧光の長さ、材料の電氣傳導度等が重要なものである。又冶金學的條件としては電極材料及び被覆物質の成分及び量、熔融溫度、熔融時間、冷却速度等がある。

¹⁾ 岡田 電氣學會雜誌 昭和 8 年 2 月

此等は作業上重大な事項であるが尚此の外、鉢の厚さ、棒の太さ Weaving の大小、棒の角度、地線の位置、其の他一切の準備によつて影響される。

殊に鎔接手の技倅、身心の状況等は鎔接結果を左右する重大なものであることは言ふまでもない。

斯く鎔着金屬は幾多の影響を蒙つて鎔接棒から鎔着金屬に變化するのであるから同一材料を用ひても結果にはかなり大きな變化を生ずる場合がある。此等の諸條件を同一に保ち得たとしても鎔接棒は氣化、熔融、鎔着の過程に大氣中の酸素、窒素と反応し、此等の瓦斯を相當多量に吸收すると共に鎔接棒の含有元素を酸化消失する。

含有元素の減少は物理的に行はれる場合と化學的に行はれる場合があり前者は主として飛散されるもので含有元素は一様に消失するので百分率には影響が少いに反し化學的に減少する場合は元素の種類或は化合物によつて著しく異り選擇的酸化が行はれる。鎔接棒芯線中の満鐵、炭素等は著しく減少するに反し磷、銅等は含有率の上で増加を示すこれは鐵の酸化消失に伴はず安定にして機械的に失はれる以外絶對量に殆ど減少なきものと考へられる。²⁾

被覆剤中に含有される場合³⁾ も同様に選擇的變化が行はれる。又被覆剤が鑛滓成分及び合金元素を含む時熔鐵が鑛滓と接觸してゐる間に含有元素が増減する。

又一層鎔着は一種の鑄造であつて鎔接部が鑄物状になることを免れない。然し鑄造と異なる點は被鎔接材と融合し又多層鎔接に於ては不規則な熱處理をうける。従つて鎔接部の機械的性質が良好な爲には鑄造状態乃至此等不規則な熱處理状態で著しく針狀結晶を析出するとか結晶が成長して脆弱になるものは好しくない。

然るに鐵の磁氣的性質を良好ならしめるには不純物の少いことが最も重要であり、又結晶粒の大きいものがいい。故に電解鐵の真空熔融、真空燒鈍³⁾ 等を行つたものは非常に誘磁率が高く履歴損失が少い。然し若干の元素は誘磁率を高め履歴損失を減ずるに効果がある。4% Si 或は 2.25% Si 鐵の如き電氣鐵鉢としてあまりにも有名である。又 Al P 等も鐵の磁氣性質を良化するものと認められてゐる。

鎔着鐵の電氣抵抗は含有される不純物の種類にもよるが極めて低炭素の鎔接棒を用ひる鎔接では大體不純物の少い

²⁾ Hoffmann Die Elektroschweissung. S. 223, 1931.

³⁾ 岡田 鎔接協會誌 昭和 8 年 8 月及び 10 月

⁴⁾ Yensen Trans. A. I. E. E. Vol 34 p. 2601 1915.

もの程固有抵抗が小である。此の事實は先きに著者が研究せることより察知し得られる。

鎔接棒

鎔着金屬は上述の如く種々なる條件によつて變化するが同一作業條件を維持し得るすれば鎔接棒の材質に依つて略定まる。本研究に使用せる鎔接棒は總て直徑 4 mm 長 450 mm のもので市場品と試作品に分けて考へるのが便利と思ふ。

市場品は各製作者が被覆剤に對し創案があり、製作上に秘訣を有する故に簡単な化學分析によつて其の詳細な成分を知ることは極めて困難である。蕊線の成分は分析で容易に決定し得るし、又鎔着して得られる金屬も作業條件があまり異なる場合は被覆棒を用ひた場合も大體信頼されるべき値が得られる。

鎔着のまゝの性質を試験する爲に用ひた鎔接棒は第1表乃至第3表に示す如くである。試作鎔接棒は種類が相當多くなつたので順序を示す番號と被覆剤の成分を示す記號とを併用した。

記號 S 硅素 Al アルミニーム（但し他の成分と併用される時は A とす）P 燐 M 満俺 尚接尾字 1, 2, ……は順次添加量の多いことを表はす。

第1表 鎔接棒蕊線分析表

鎔接棒 番號	組成					被覆剤主要成分
	C%	Si%	Mn%	P%	S%	
1	0.01	痕跡	0.02	0.01	なし(電解鐵)	
2	0.12	0.02	0.39	0.01	0.05	なし(試作鎔接棒用)
3	0.06	0.04	痕跡	0.01	0.02	石灰、木炭粉、曹達
4	0.18	0.17	0.34	0.01	0.035	満俺鐵、青石綿
5	0.09	痕跡	0.34	0.025	0.02	満俺鐵、珪素鐵
26	0.06	0.016	0.385	0.02	0.04	なし(原子水素鎔接用)

第2表 蕊線の電磁氣的性質

鎔接棒 番號	μ_{max}	履歴損失 エルグ/cm ³ /サイクル	残留磁氣 ガウス	抗磁力ギ ルバート	固有抵抗ミ +/ m	—cm
2	1,490	15,000	10,000	2.9	12.70	
3	1,590	13,280	8,100	2.7	10.35	
4	1,540	14,950	9,550	3.0	12.61	
5	—	—	—	—	12.51	

No.1 鎔接棒は電解鐵の鋸を曲げて作った中空棒であり No. 2 は低炭素鋼線にして試作鎔接棒の蕊線に用ひた。 No. 3, No. 4, No. 5 は夫々市場にある被覆鎔接棒である。 試作棒の塗布元素及び塗布量は第3表の如くであるが高誘磁率、低履歴損失を有する爲に著者は Si, Al, P を種々なる割合に含んだ鎔接棒を作り被覆剤も Si のみのものは Si 量に應じ一本に付き 0.4 乃至 2 gr 位の薄被覆を行つ

第3表 試作鎔接棒

鎔接棒 番號	記號	塗布合金元素量 (蕊線に對し)				被覆剤
		Mn%	Si%	Al%	P%	
6	S ₁	—	1.0	—	—	CaCO ₃ , Na ₂ CO ₃ 水硝子
7	S ₂	—	2.0	—	—	〃
8	S ₃	—	2.5	—	—	〃
9	S ₄	—	4.0	—	—	〃
10	Al ₁	—	—	0.5	—	青石錦
11	Al ₂	—	—	1.0	—	〃
12	Al ₃	—	—	2.0	—	〃
13	P ₁	—	—	—	0.35	CaCO ₃ , Fe ₂ O ₄ 水硝子
14	P ₂	—	—	—	0.50	青石綿
15	P ₃	—	—	—	1.0	〃
16	AS ₁	—	1.0	1.0	—	CaCO ₃ , Na ₂ CO ₃ 水硝子
17	AS ₂	—	2.0	1.0	—	青石綿
18	AP ₁	—	—	1.0	0.15	〃
19	AP ₂	—	—	1.0	0.30	〃
20	MS ₁	3.0	1.0	—	—	青石綿
21	MS ₂	3.0	2.0	—	—	〃
22	MA ₁	3.0	—	0.5	—	〃
23	MA ₂	3.0	—	1.0	—	〃
24	MP ₁	3.0	—	—	0.25	〃
25	MP ₂	3.0	—	—	0.50	〃

た。其の他は青石綿を被覆主成分としたので 1 本に付き 5~6 gr を使用した。此の時の青石綿以外の鑛滓となるべき塗布剤は極く少量を用ひた。

上記 Si, Al, P のみを含んだもの、鎔着金屬を試験した結果鎔接作業、機械的性質が非常に低下したので磁氣的性質には寧ろ有害と認められてゐる⁵⁾ Mn を少量添加した鎔接棒を以つて作業した。Mn を 3% としたのは前に著者が研究⁶⁾した結果から青石綿被覆の場合鎔着金屬中に殘る Mn が略 0.5% 以下なることが明であるに依つた。又第3表の添加合金元素として Si は珪素鐵 (75% Si) Mn はマンガン鐵 (72.36% Mn) P は燐鐵 (20% P) Al は純アルミニーム細線を使用した、塗布剤及び合金元素の結合剤は水硝子、フノリ、カゼインを適宜使用した。

鎔着方法

前述の如く作業條件が變化すると結果も從つて變るが作業條件は電機器の特性、鎔接棒及び母材等によつて變へなければならないので他の條件が大體一定のときは鎔接棒の成分被覆剤の種類、量を容易に作業し得る様に調整しなければならない。著者が實驗に使用した鎔接機は富士電機製造株式會社製直流機、日立製作所及び日本電氣鎔接機株式會社製交流機で豫備實驗を行ひ略適當な條件で鎔着を行つた。

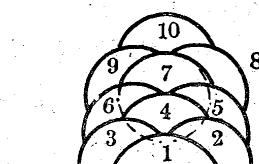
鎔着方法は厚さ 12 mm, 幅 40 mm, 長さ 300 mm の鐵鋸

⁵⁾ Spooner Properties and Testing of Magnetic Material page 43.

⁶⁾ 岡田 上掲 (3)

上に第1圖の如く漸次累層し、それより断面 1cm^2 長さ

第1圖 鎔着順序



260mm の丸棒を削成した。Weaving を少くし層數を多くした。其の他の第4表の如くである。

表中鎔接手 A は著者自身に行つたもの B は教室の鎔接工 C は原子水

素鎔接工が行つたものである。鎔接電流(直)は直流機を用ひたもので交流機で作業が困難な場合にのみ使用した。

末行の鎔接性のうち甲は直流、交流何れでも作業容易にして結果も比較的良好なものであり、乙は直流でなければ作業に困難を感じるもの又は直流、交流何れにても作業が稍容易でなく結果も良くないもの、丙は作業が相當困難なもの、丁は普通の方法では鎔接が至難と考へたものである。

第4表 鎔着作業條件

鎔接棒番號	記號	鎔接手	弧光電壓	鎔接電流	鎔接性
1	—	A	18	100(直)	乙
2	—	A	18	120(直)	乙
3	—	A	20	130	乙
4	—	A	26	110	甲
5	—	A	18	130	甲
6	S ₁	B	23	110(直)	丙
7	S ₂	B	23	120(直)	丙
8	S ₃	B	23	120(直)	丙
9	S ₄	A	23	120(直)	丁
10	Al ₁	A	25	100	乙
11	Al ₂	A	25	100	乙
12	Al ₃	A	25	100	丙
13	P ₁	A	26	95	乙
14	P ₂	A	23	95	乙
15	P ₃	A	26	90	丁
16	AS ₁	A	25	120	乙
17	AS ₂	A	25	120	乙
18	AP ₁	B	25	110	乙
19	AP ₂	B	25	110	乙
20	MS ₁	B	24	120	甲
21	MS ₂	B	24	120	甲
22	MA ₁	A	24	110	甲
23	MA ₂	A	24	110	甲
24	MP ₁	B	24	110	甲
25	MP ₂	A	24	110	甲
26	H	C	—	—	甲

此等作業容易ならざるものは上記作業條件の外に被覆剤の成分、量、鎔接電流、鎔接速度等を種々變へて行つたが結局普通の場合は上表の如く表はして差支なからうと思ふ。此の中 Si は量が多くなるに従つて鐵の鎔融點が降下し鎔接棒がとけると棒の先端に大い球になつて附着し、これが落下する度に弧光が非常に動搖して消滅するので交流では作業が殆ど不可能である。被覆剤として青石綿を用ひたものは鎔滓の珪酸度があまりに高くなる爲め作業が更に困難である。

Si が多くなると結晶粒が大きくなり脆くて鎔滓をとるときの軽い槌打にて錠裂を生じ到底使用に堪へないものと考へ丁とした。斯くある値以上に Si を加へることは實用上不可能である。Al, P も略同様であつてある量以上になると錠裂を生じやすく極めて脆弱になる。原子水素鎔接法は熱源と補充剤が別である故に作業が比較的容易である。

鎔着金屬の化學組成及び比重

前述の如くして鎔着したものゝ化學組成及び比重を決定した。結果は第5表及第6表の如くである。

第5表 鎔着金屬の化學組成及び比重(1)

鎔接棒番號	組成						見掛の真比重 = 7.85 と假定す	氣孔率%
	C%	Si%	Mn%	P%	S%	N%		
1	0.027	痕跡	痕跡	0.03	痕跡	0.080	7.42	5.5
2	0.068	痕跡	0.041	0.08	0.03	0.076	7.42	5.5
3	0.083	0.050	0.085	痕跡	0.012	0.071	7.48	4.7
4	0.116	0.087	0.35	0.02	0.038	0.041	7.80	0.65
5	0.095	0.145	0.71	0.02	0.03	—	7.76	1.0
26	0.035	痕跡	0.226	0.031	痕跡	—	7.80	0.65

窒素は前に著者が同じ鎔接棒の鎔着金屬に就て比色法で決定した値で幾分低い様であるが相互關係は明であつて Mn の相當殘るものは大氣より吸收される N₂ が著しく少く顯微鏡で見られる窒化物の存在も甚だ減少する。從つて比重が増し氣孔がなく緻密な鎔着金屬が得られる。此等普通の軟鋼鎔接部の性質は鎔着金屬の比重の大小が良否を決する一つの指針となる。然し第6表の如き特殊の合金元素を加へたものでは比重と機械的性質が必ずしも一致するとは限らず、唯鎔着金屬が緻密なりや否やを示すに効果がある。

第6表 鎔着金屬の組成及び比重(2)

鎔接棒番號	記號	組成			見掛の真比重 = 7.85 と假定す	氣孔率%
		Mn%	Si%	Al%		
6	S ₁	—	0.374	—	—	6.88 12.3
7	S ₂	—	0.925	—	—	7.42 5.5
8	S ₃	—	1.29	—	—	7.18 8.5
9	S ₄	—	—	—	—	—
10	Al ₁	—	—	0.037	—	6.98 11.0
11	Al ₂	—	—	0.042	—	7.19 8.5
12	Al ₃	—	—	0.095	—	7.51 4.3
13	P ₁	—	—	—	0.463	7.33 6.6
14	P ₂	—	—	—	0.547	7.39 5.8
15	P ₃	—	—	—	—	—
16	AS ₁	—	0.470	0.087	—	6.92 11.8
17	AS ₂	—	0.680	0.068	—	7.20 8.3
18	AP ₁	—	—	0.061	0.133	7.06 10.0
19	AP ₂	—	—	0.125	0.220	7.16 8.75
20	MS ₁	0.483	0.214	—	—	7.70 1.9
21	MS ₂	0.549	0.736	—	—	7.52 3.2
22	MA ₁	0.451	—	0.040	—	7.80 0.65
23	MA ₂	0.311	—	0.065	—	7.64 2.6
24	MP ₁	0.292	—	—	0.366	7.72 1.6
25	MP ₂	0.346	—	—	0.563	7.78 0.8

第6表の分析中 Al は石丸氏の方法⁷⁾に依つて決定した Fe の分離が完全に行かなかつたものは更に之れを熔融し分離して求めた。

第5表の結果及び後に時效試験の時に作製せる各分析結果より被覆剤に加へた合金元素が鎔着金屬中に残る割合の平均値を求めたるに次の如くである。

Mn 12.6% Al 5.55% Si 39% P 100.3%

著者が高力鋼の鎔接に際して行つた結果と比較して Mn は略一致してゐる。 Si は多い値を示した。これは前回に比し添加量が多く塗布剤を薄く塗つた爲である。

比重は 6.88 より 7.8 まで變化してゐる。合金成分によつて多少變るが今 7.85 を鎔着金屬の眞比重と假定して氣孔率を計算した。 Si , Al 等が増すと氣孔率は減少する様であるが裸線の場合に比しよくないのであつて作業上複雑な關係が感ぜられる。

此の場合 Mn を加へたものはすべて氣孔率が少く緻密である。前述の如く大氣の影響を減少し脱酸、脱窒に最も效果があるものと思ふ。

測定装置

使用せる測定機器は下記の如くである。

電氣抵抗 ダブルブリッヂ及び附屬計器

磁氣性質 Koepsel Permeameter 及び附屬計器

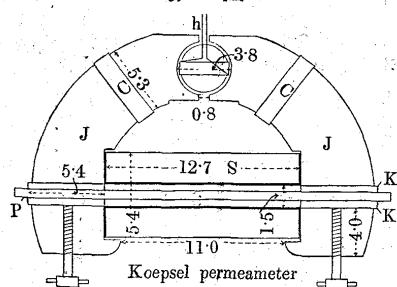
Picuo Permeameter 及び附屬計器

硬度 ロックウェル硬度計 (Bスケール使用)

抗張力 松村式萬能試験機

衝擊値 アイゼット標準型試験機

第2圖



磁氣性質の測定には Koepsel permeameter を用ひた。このメーターは第2圖の如き構造のもので D'Arsonval 型の直流計と相似であつて可動線輪中に一定電流を通じ永久磁石の代りに大きいヨーク (J) があり、兩方のヨークの間を試片 P で完結し磁化線輪によつて圍まれてゐる。このメーターは空氣間隙を有する故誤差を生ずるので所謂 Shearing Curve を作つて訂正しなければならないので測定上適當でないであ

るが他に適當な裝置を有たなかつたのと訂正を充分に行へば略正確さが得られるので用ひた⁸⁾。又同一の試片で他の機械試験も一貫して出来ることは多少便利である。

然しその試片に就て一々正確な Shearing Curve を作ることが出来ないので誘磁率の異なる 2~3 本の材料に就て Double Bar 型の Picuo Permeameter(京大のもの)で測定した結果と比較して作成し訂正に用ひたのであるが實用上略充分な結果を得たと信ずる。

電磁氣的特性

鎔着鐵は前述の如く長 260 mm 断面 1 cm^2 の丸棒に削成し測定を行つた。其の結果は第7表及びヒステリシスループ第3圖乃至第26圖の如くである。

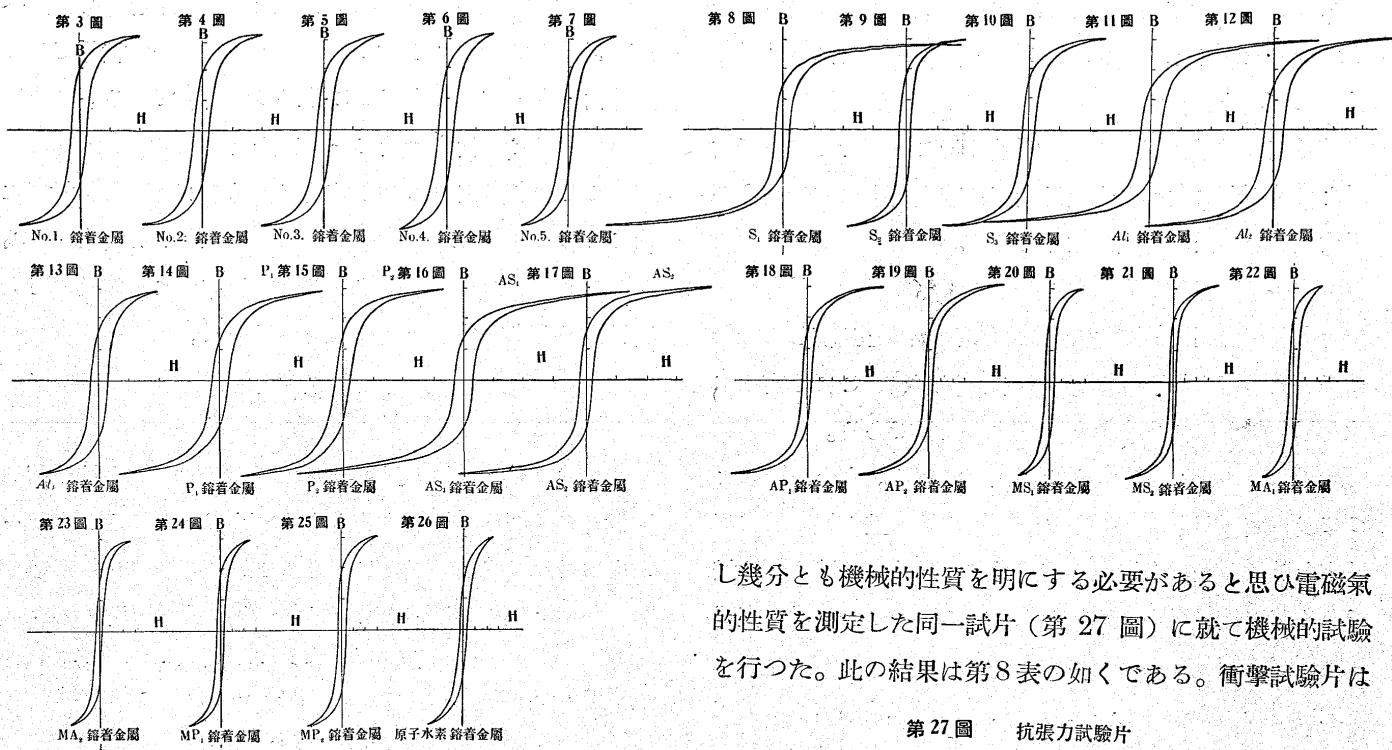
第7表 鎔着金屬の電磁氣的性質(鎔着の儘)

鎔接棒番號	記號	μ_{\max}	履歴損失 エルグ/ cm^3 サイクル	B _{max} = 15,000	殘留磁氣 ガウス	抗磁力 ギルバート/cm	電氣固有 抵抗ミク ロオーム -cm
1		720	30,700	9,300	6.8	12.11	
2		710	29,500	8,300	6.3	12.50	
3		765	27,900	8,800	6.0	12.42	
4		760	30,500	9,000	6.2	14.67	
5		890	22,600	8,000	5.0	16.68	
6	S ₁	660	26,700	7,000	5.6	18.73	
7	S ₂	1,010	18,500	8,500	4.3	26.25	
8	S ₃	920	22,700	7,600	4.5	30.02	
10	A ₁	630	35,700	7,600	8.0	14.38	
11	A ₂	685	34,400	8,000	7.8	13.68	
12	A ₃	800	29,700	8,700	7.2	14.20	
13	P ₁	740	30,100	7,100	7.3	16.22	
14	P ₂	760	28,800	6,900	6.6	18.86	
16	AS ₁	760	32,100	7,500	7.8	16.87	
17	AS ₂	945	26,000	7,500	5.0	30.10	
18	AP ₁	900	17,500	6,700	4.0	16.51	
19	AP ₂	930	16,100	6,600	3.5	19.10	
20	MS ₁	1,080	16,100	9,000	3.3	18.60	
21	MS ₂	1,210	14,500	8,500	2.9	24.08	
22	MA ₁	980	16,500	9,200	4.0	14.94	
23	MA ₂	1,110	14,000	7,500	3.0	18.76	
24	MP ₁	1,050	15,000	8,200	3.3	17.58	
25	MP ₂	1,100	17,000	8,700	3.5	18.05	
26	H	1,350	13,800	6,300	2.8	13.31	

第7表の結果を見るに電氣抵抗は Si , Mn 等の増加に従つて軟鋼の 2 倍乃至 3 倍に増加するが此等を加へない普通の鎔接棒にあつては相當の氣孔を有し乍ら低炭素の芯線より低い固有抵抗を示す。従つて低電氣抵抗を必要とする場合は大氣の汚穢を受けても裸線の直流鎔接が良好であるこれに反し eddy current loss を少しくやうと云ふ場合磁氣回路の鎔接で高電氣抵抗を要する場合は Si を多くするのが最も有效である。

⁸⁾ Spooner. Properties and Testing of Magnetic Materials page 215.

(3) 鎔着金属ヒステリシスループ



磁氣性質に於て誘磁率 μ はバージンラインにて決定したが裸線の場合の μ_{max} は 700 位 B_{max} を 15,000 ガウスとして履歴損失は略 30,000 エルグ/ cm^3 /サイクルである。然し Si , Al , P 等に Mn を加へたものは $\mu_{max}=1,000 \sim 1,200$ 履歴損失は 15,000 エルグ/ cm^3 /サイクルで μ_{max} に於て 50% の増加を示し履歴損失に於て 50% の減少を示す。原子水素鎔接は更に良好である。 Si を含むもの及び原子水素の鎔着金属は μ_{max} の時の B の値が低く裸棒の場合高い値を示した。

残留磁氣は Si , Al を加へたものは稍高く P を加へたものは低く表はれた。抗磁力は Si 等と Mn の共存するものは著しく低い。然し Mn のみが多い場合は如何に鎔着金属が緻密でも No. 4 鎔接棒の如く磁氣性質は決して良好でない。尙ある量以上に Mn を増加すれば却つて誘磁率を低下し履歴損失を増すことは Yensen 等の研究に依つても明である。

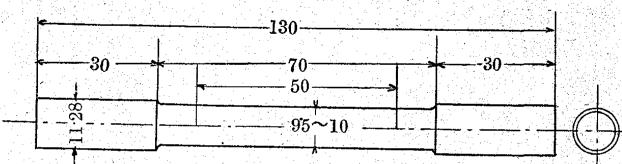
蓋し此の場合 Mn は Mn 自身が磁氣性質に効果をあへるのではなくして大氣の影響によつて磁氣性質の悪化されるのを防ぐに因るものと思ふ。

機械的性質

鎔着金属が前述の如き鎔接すべき電気回路或は磁気回路にあつて荷重を受ける場合は勿論凡そ接合と云ふ目的に對

し幾分とも機械的性質を明にする必要があると思ひ電磁氣的性質を測定した同一試片(第 27 圖)に就て機械的試験を行つた。此の結果は第 8 表の如くである。衝撃試験片は

第 27 圖 抗張力試験片



丸型のまゝで所定の切込を入れ衝撃抵抗面は $0.8 cm^2$ になる様して試験した。

第 8 表 鎔着金属の機械的性質

鎔接棒番號	記號	抗張力 kg/mm^2	延伸率 (ゲーデ= 50mm)%	アイゾック衝撃値 $m.kg.cm^2$	硬度ロツク Bスケール	抗張試驗片 切斷破面
1		31.4	8	0.2	52.0	S.
2		31.4	7	0.7	53.5	B.S.
3		35.0	10	—	57.5	B.S.
4		50.4	18	2.6	73.5	G.
5		45.2	12	3.3	78.5	B.G.
6	S_1	17.7	3	1.8	65.7	S.
7	S_2	32.8	—	3.4	81.0	S. 標點外
8	S_3	22.9	2	—	79.7	S.
10	Al_1	23.9	5	—	64.0	B.S.
11	Al_2	18.2	6	—	69.0	B.S.
12	Al_3	32.0	8	—	76.0	B.S.
13	P_1	33.8	6	—	82.8	B.
14	P_2	25.3	1	1.2	93.6	C.
16	AS_1	18.6	3	—	66.0	S.
17	AS_2	25.3	3	—	74.0	S.
18	AP_1	33.7	6	0.3	70.0	B.
19	AP_2	25.3	—	0.5	72.0	S.C.
20	MS_1	47.6	11	3.9	85.0	B.G.
21	MS_2	45.7	—	4.0	85.2	S. 標點外
22	MA_1	46.6	15	2.8	88.0	B.G.
23	MA_2	33.1	1	0.3	94.0	C.S.
24	MP_1	44.5	6	0.5	87.0	C.
25	MP_2	41.7	1	0.3	84.0	C.
26	H	39.8	25	7.4	77.0	B.G.

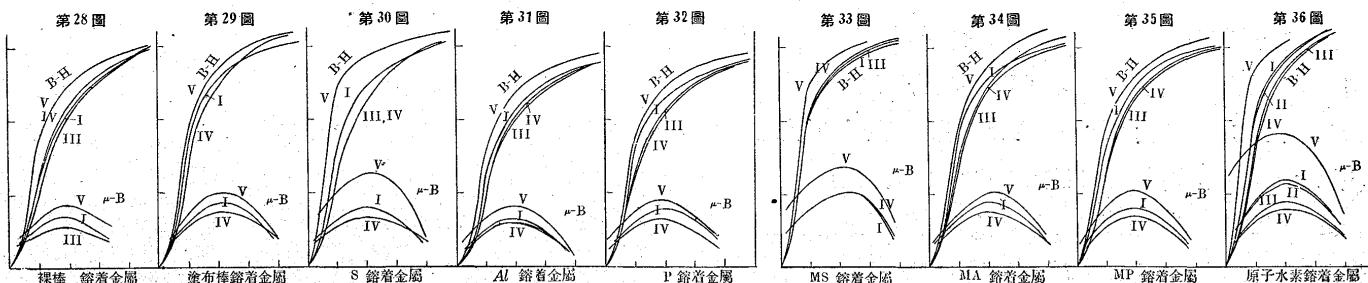
表中末行の破面の中 S は鐵滓の混入を示し B は氣孔の存在を表し C は結晶が大きくキラキラした破面のもの

Gは軟鋼の如き良好な面を表したものである。第8表の結果より見て抗張力に於て Mn を加へたものは破面に氣孔がなく一齊に高い値を示した。然し Si, Al, P の多いものは結晶が成長し殊に P, Al の多いものは延伸率が殆どなく衝撃振動を受ける場合に使用して極めて危険なことが知られる。衝撃値より見て裸棒は非常に低い。又 P Al の多いものも低いに拘らず Si 及含有するものは衝撃抵抗

中にて徐々に冷却し、(V) 常温で測定した。この結果は第28圖乃至第42圖の如くである。

以上時效及び 800°C 焼鈍の結果を見るに硬度は時效の前後に於て殆ど變化を認め難いが焼鈍した場合は減少を示してゐる。電氣抵抗は時效中殆ど變化なきも僅に減少し焼鈍の結果大に減少した。然し電氣抵抗の絶対値は Si, Mn を含むものが最大で珪素のみを含むものが之れに次ぎ然も

(5) 時效及焼鈍せる鉄着金屬の磁氣誘導曲線



が大である。Si 或は Al の比較的少いものと Mn を共有するものは機械的性質も良好である。原子水素鋸接は上記の如く機械的性質も優秀で殊に衝撃抵抗が大である。

鉄着金屬の時效及び焼鈍效果

金属材料の一つの性質として時效に就て考へる必要がある。殊に磁氣性質に於ける時效は實用上重要である。著者は此の點に對する研究を進め第9表及び第10表の如く鉄着金屬の試験片を作製し時效試験及び焼鈍效果を観た。

鋸接の儘 (I) の試片を測定し磁氣を除きこれを電氣爐中にて 100°C 保ち 1 日、4 日 (III) 及び 8 日 (IV) 後取り出して測定を行つた。其の後試片を 800°C に 1 時間保ち爐

第9表 鉄着條件及び機械的性質

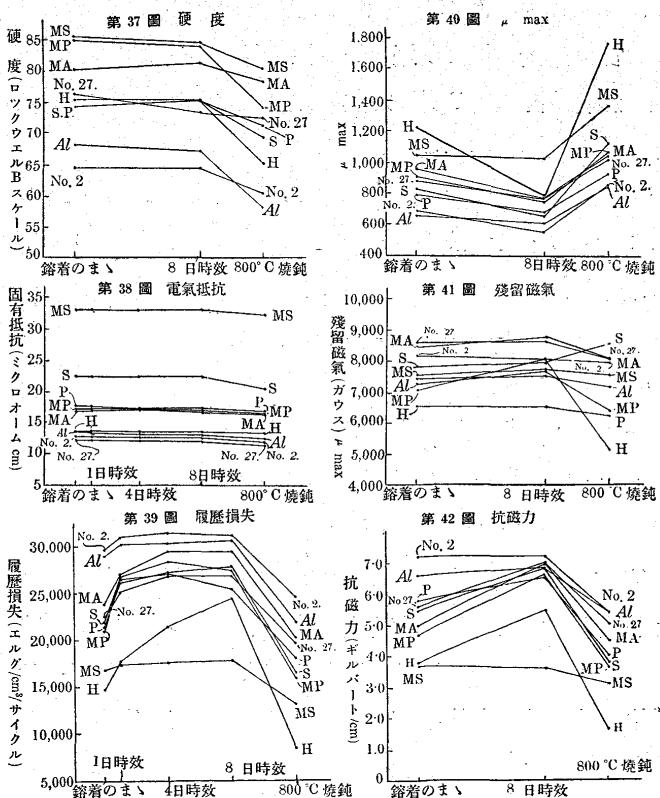
鋸接棒 番號	記號	鋸 弧光電 接 接 手 接 壓 接 流 接 性 手 ボ ル ト ペ ア	鋸 接 電 接 接 性 手 ボ ル ト ペ ア	鋸 見 接 接 性 手 ボ ル ト ペ ア	硬度 ロ ツ B ス ケ ル	m.kg/cm ²	ク ウ エ ル ア イ ジ ツ ト 衝 撃 値
2	B	18	120(直)	乙	7.31	64	0.5
27	(市場品) A	24	120	甲	7.67	76	0.4
28	S	23	100(直)	乙	7.47	74	3.8
29	A	25	120	乙	7.18	68	0.5
30	P	26	95	乙	7.26	74	0.3
31	MS	A	24	110	甲	7.61	85
32	MA	B	24	110	甲	7.63	80
33	MP	A	24	110	甲	7.49	85
26	H	C	—	—	7.78	75	—

第10表 鉄着金屬の分析結果

鋸接棒 番號	記號	組成					
		C%	Si%	Mn%	P%	S%	Al%
27		0.063	痕跡	0.02	0.057	0.03	—
28	S	—	0.64	—	—	—	0.058
29	Al	—	—	—	—	—	—
30	P	—	—	—	0.458	—	—
31	MS	—	0.93	0.583	—	—	—
32	MA	—	—	0.472	—	—	0.031
33	MP	—	—	0.275	0.597	—	—

(6) 時效及び焼鈍による硬度及電磁氣的性質の變化

鋸接番號 2 27 28 29 30 31 32 33 26
記 號 S Al P MS MA MP H



此等と原子水素鋸接のものは時效中に固有抵抗が變化しない特性を示した。

磁氣性質はこれに反し履歴損失の増加、 μ_{max} の減少等時效による變化が顯著であつて Si, P 等を含むものも一般に磁氣回路の鋸接部は時と共に相當に磁氣抵抗が増すことは明かである。然し高溫で焼鈍すれば非常に性質を良化す

ることが出来る。残留磁氣は時效中殆ど變化しないが僅に増加の傾向である。800°Cで焼鈍を行つたものは珪素を加へたもの以外は全部減少した。抗磁力は時效中非常に増加するこの場合も珪素を含むものは寧ろ減少する傾向を示した。800°Cで焼鈍したものはすべて大に減少した。原子水素鎔接を行つたものが時效中の變化が非常に大きいのとSiを含む鎔着金屬が全く特異の結果を與へることは注目に値すると思ふ。

此等の鎔着金屬を得た鎔接棒により軟鋼板を鎔接し上記同様の時效焼鈍試験を行つたが上の場合と全く同様の傾向を示した。唯鎔接試験片のときは材料の成分加工焼鈍の過程により結果が異なる。又珪素を塗布した鎔接棒は作業が非常に困難であるから之れに對する適當の工夫と鎔接棒の特性を知る爲に練習が必要である。

電磁氣的性質に及ぼす加熱冷却條件の影響

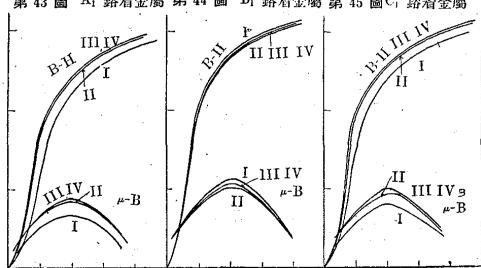
以上の實驗により磁氣性質が時效に因り非常に悪化し焼鈍に因り鎔接の儘より遙にいゝ性質が得られるので時效に因る影響を防止する爲の加熱條件を決定する爲に次の鎔接棒で鎔着金屬を作りこれを300°C及び500°Cに加熱し一種の焼鈍を行つた。空冷のときは加熱溫度より常温までに20~40分を要し徐冷のときは4~6時間要する様に冷却した。

- | | |
|-----|---|
| 第一類 | A ₁ No.2 鎔接棒(裸線) |
| | B ₁ 蕁線に對しSi 2% Mn 2% を塗布したもので作業頗る困難 |
| | C ₁ 市場品被覆棒にして作業容易 |
| 第二類 | A ₂ A ₁ と同じ |
| | B ₂ 蕁線に對しSi 1% Mn 1% を塗布したもので氣泡の生成多く作業困難 |
| | C ₂ C ₁ と同じ |

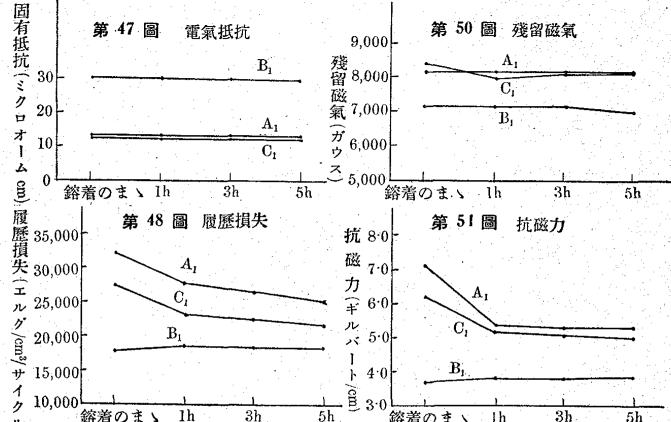
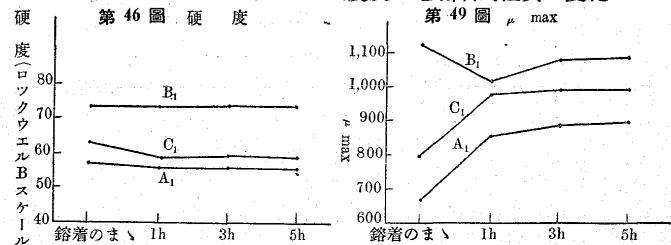
第1類は加熱溫度は300°Cとし先づ1時間加熱しそれより爐中にて徐冷して後試験しこれを再び300°Cに2時間保ち前へと同様にし更に2時間加熱して同様にし同一試験片に就て結局合計加熱時間1時間、3時間、5時間後の測定を行つた。この結果が第43圖乃至第51圖に示す通りである。

普通軟鋼用の鎔接棒であれば300°Cに1時間保てば鎔接の儘より餘程よくなる。即ち時效による惡化を完全に除き得たものと思ふ。100°C加熱した場合とは著しい相違である。B₁のみは幾分低下して未だ不充分なることが分る。これを續けて3時間、5時間になるとすべて僅か寛であるがよくなる。然し此の範圍に於ける程度は極めて僅で

(7) 300°Cの加熱による磁氣誘導曲線の變化
第43圖 A₁ 鎔着金屬 第44圖 B₁ 鎔着金屬 第45圖 C₁ 鎔着金屬



(8) 300°Cの加熱による硬度及び電磁氣的性質の變化
第46圖 硬度 第49圖 μ_{max}

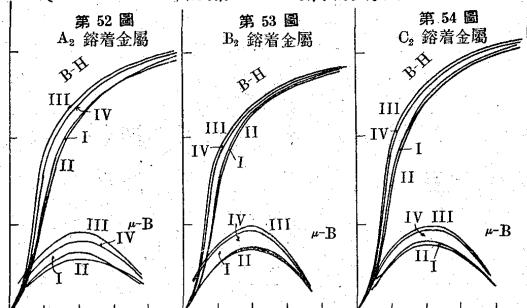


普通の場合 300°C の加熱を 1 時間以上行ふ必要はないと思ふ。B₁ の如き特殊のものも 3 時間保てば時效による惡化の範囲を脱するので焼鈍效果も充分である。

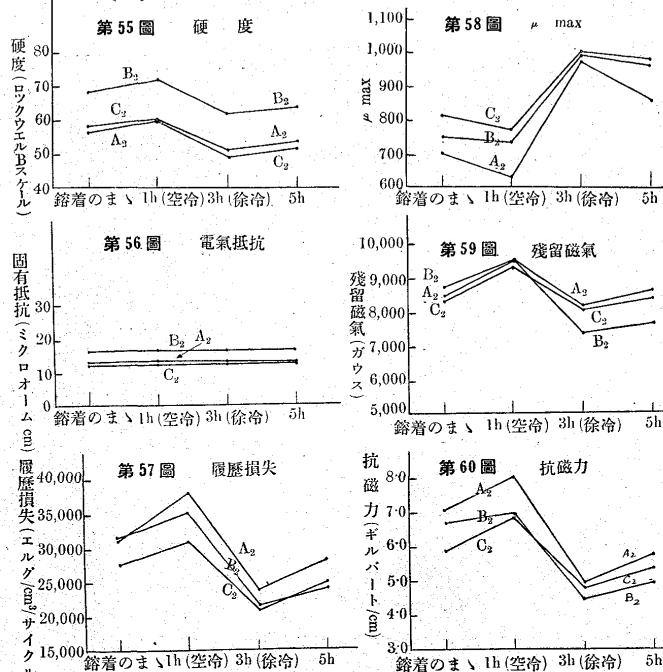
從つて夫れ以上高溫であれば更に加熱時間を短縮し得ることは容易に想像されるが著者は第2類に對しては加熱後の冷却條件が磁氣性質に影響しないかを觀る爲に500°Cに1時間加熱しこれを爐より取り出し、空冷して試験し、次にこれを再び500°Cに2時間加熱し今度は爐中にて徐冷して試験し3回目は2回目同様に加熱し160°Cまで爐中にて徐冷し其れ以下は爐より取り出して空冷し斯る低溫度の冷却條件が影響するや否やを檢べた。この結果は第52圖乃至第60圖に示す様である。

此の結果を見て焼鈍後の冷却が如何に重要なか痛感される。結果の示す如く500°Cで焼鈍し空冷したものは鎔接のまゝに比し遙に高い履歴損失を與へ殊に前の實驗で殆ど變化を見なかつた残留磁氣が高くなつた。此れに反し緩冷したものは300°Cで長時間焼鈍したものよりもよくなる。前の800°C焼鈍の場合と比較して焼鈍溫度は高い

(9) 500°C の加熱による磁気誘導曲線の變化



(10) 500°C の加熱による硬度及び電磁氣的性質の變化



程磁気誘導が高くなる。

3回目の160°C以下の低温の空冷も磁気性質に顯著な変化をあたへてゐるので磁気回路の鎔接部は極めて緩冷されなければならないことが分る。

著者は上記の如き磁気的性質の変化を相の變異に因るものと假定し此等焼鈍及び冷却の差異が機械的性質殊に衝撃抗力に對して影響がないかを實驗した。其の結果は第11表の如くで高温徐冷したもののが硬度は低くなるが衝撃値に對しては特に焼鈍に因る脆化等を認め得なかつた。これは一つは場所の關係があり鎔着金屬が均質でないこと。又一つ

第11表 焼鈍と衝撃抗力

記号	焼鈍温度 °C	冷却方法	硬度 ロックウェル B スケール	アイゾット衝撃値 m. kg/cm ²
A ₁	300	徐冷	56	0.3
B ₁	300	〃	74	2.9
C ₁	300	〃	59	0.6
A ₁	500	〃	56	0.25
B ₁	500	〃	70	2.8
C ₁	500	〃	50	0.8
A ₂	500	空冷	56	0.35
B ₂	500	〃	71	3.7
C ₂	500	〃	57	0.7
A ₂	500	徐冷	51	0.4
B ₂	500	〃	61	3.5
C ₂	500	〃	55	0.65

は裸棒や普通の塗布棒では鎔着金屬の衝撃抗力が非常に低い爲であり何れにしても殆ど無抵抗に近い。Si, Mn を含んだものが斷然良好で且焼鈍温度、冷却方法の相異に因る影響が少いことは明である。衝撃破壊面は第61圖の如く

(11) 61圖 衝撃破壊面



Si, Mn 添加の場合のみ輝いた結晶面がなく特異の破面を示し含隣のものは甚しくキラキラした面を表してゐる。

鎔着金屬の顯微鏡組織

電弧鎔接法による鎔着金屬は前述の如く鎔接棒芯線が電弧熱によつて氣化熔解し被覆剤中の諸元素と反応し鎔接の進行と共に順次凝固するものであつて且比較的急冷される結晶は Molton Pool の壁より鎔着金屬の中心線上稍鎔接の進行方向に向つて成長する。A₁ 変態點でセメンタイトの析出する場合はオーステナイトの結晶面に出る場合が多く非常に少い時は結晶粒界に見られることもある。又大氣中の窒素を吸收して窒化物を析出する。窒化物は針状組織を呈して表はる場合が多い。此等は單層鎔接の場合であるが多層鎔接の場合鎔着金屬の下層は上層の熱によつて一種の熱處理をうけ上層と下層で組織が異なる。然し Mn 等が相當に含れてゐる場合窒素量は非常に少く針状組織も表れない。

又鎔着金屬は Etching Pit が出易い傾向がある。これは不純物の熔解殘留應力等に起因するものと考へられる。

普通電弧鎔接で得られる組織は寫真 No.1 より No.6 の様である。No.1 は電解鐵裸棒の鎔着金屬で普通の熔融凝固による電解鐵の組織とは非常に異り針状窒化物の酸化物、Etching Pit が明である。

No.2 は裡棒で No.1 に比し下層に属する鎔着部で粒界が稍明瞭針状組織も多い。No.3 は No.3 鎔接棒で上層に近い部分である。

No.4 は Mn を含む No.4 鎔接棒によるもので粒界が明で針状組織が存在せず比較的一様で軟鋼の組織に近く機械的性質の良好なことを暗示してゐる。

No.5 は No.5 鎔接棒によるもので結晶粒が細く粒界が明で針状組織が認められない。No.6 は No.27 鎔接棒に

よるもので最も普通に用ひられてゐる塗布棒に共通な針状組織を示してゐる。

試作鎔接棒の組織は添加元素 Si , Al , P 共に γ 界域が Loop になり A_3 變態點が上昇し結晶粒が大きくなる。これに對し Mn を加へたものは變態點が下降し結晶が細くなる。

No. 7 は S_2 鎔接棒 No.8 は S_3 鎔接棒で結晶粒が大きく粒界が明瞭である。No.9 は S 鎔接棒 800°C 焼鈍の試片の組織である。

No.10 は Al_3 鎔接棒を用ひたものである。然し Al は分析結果の如く殆ど消失するので鎔着金屬に含有される量は實に微量であり從つて普通の被覆鎔接棒と同様で粒界も表れ針状組織も見える。No.11 は A 鎔接棒で得たものを 800°C で焼鈍した組織で結晶粒が細く針状組織も少い。

No.12 は P_1 鎔接棒で著しく針状組織が發達してゐる。これは他の含焼鎔接棒にも表はれた特異の組織であつて窒化物の針状とは趣を異にしてゐる。No.13 は P 鎔接棒によつたもの、 800°C 焼鈍の組織で針状が一層發達して

ゐる。No.14 は AP_1 , No.15 は AP_2 鎔接棒で Al は殆ど消失する關係上 P のみの組織である。

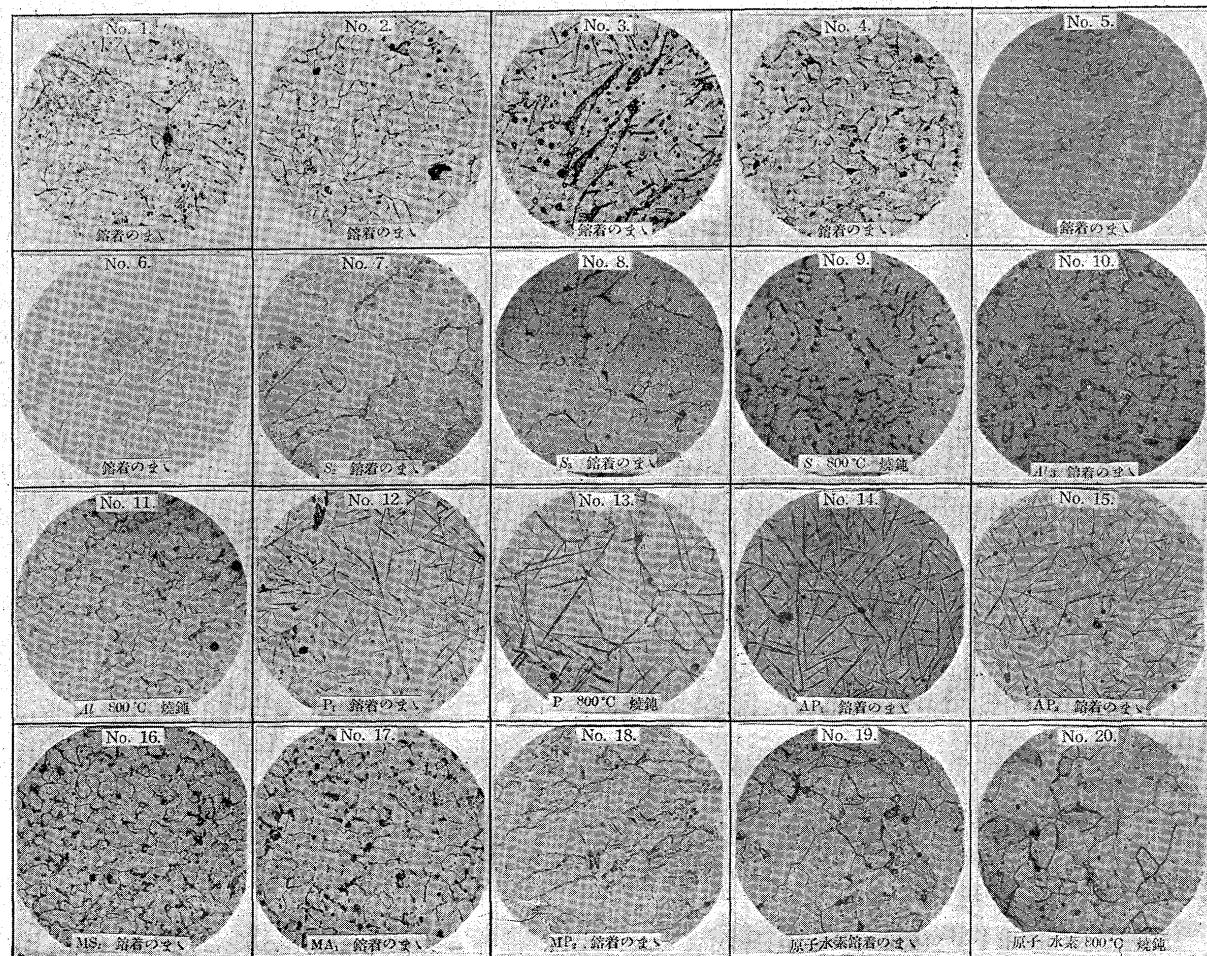
No.16 は MS_2 鎔接棒で作つたもので Mn の添加によつて變態點の降下があり、從つて結晶が細く一樣である。斯る組織は抗張力が大で延申率も多く機械的性質が優秀である。

No.17 は MA_1 鎔接棒によるもので寫真 No.10 と略同様である。No.18 は MP_2 の組織でこれは他に比して倍率が $1/2$ 以下なるに拘らず結晶粒が極めて大きい。 P の量が稍多く所々に針状が認められるので凝固の途中 Loop の $\gamma + \alpha$ の範囲を通るものと思ふ。

No.19 は原子水素鎔接法による鎔着金屬にして極低炭素鋼の組織を示し結晶粒界が鮮明である。No.20 は 800°C で焼鈍した組織であつて No.19 と大差がない。

以上は鎔接のまゝと 800°C 焼鈍の組織を示したが時効中の組織の變化は殆ど認められない。普通の鎔接棒による鎔着金屬を高溫より焼入れた場合等の組織の變化は井口博士⁹⁾等の研究がある。

顯微鏡組織



實驗結果に対する考察

以上の實驗結果より電氣回路或は磁氣回路の電弧鎔接を行ふとき鎔着金屬の電磁氣的性質及び接合の目的に對する機械的性質の兩方面より次の諸點に就て考慮した。

1. 鎔接部の熱處理が可能なる場合と不可能なる場合に就て冶金學的考察と對策

2. 電磁氣性質或は機械的性質に要求がある場合となき場合

3. 作業上の諸點と合金元素及び被覆劑

先づ熱處理が可能なる場合はすべての鎔接部に共通に然なるべく高溫で燒鈍し極めて緩冷することが必要である。殊に酸化を防ぎ不純物を除く爲に真空中或は水素瓦斯中で燒鈍を行ふと電磁氣的性質が良化する。常溫より 200° ~ 300°C の範圍に加熱されたとき短時間ならば時効により磁氣性質は悪くなるが長時間行へば漸次回復する傾向がある。此の回復は常溫では非常に長時間を要し 100 C なれば數日、 300°C なれば 1 時間で充分である。

然し斯る場合冷却速度が極めて重要で燒鈍温度より空冷するときは却つて鎔接の儘よりも磁氣誘導を低下する。然も裸棒或は普通市場にある塗布棒は此の傾向が著しく鎔着金屬の分析結果と合金の平衡狀態圖を併せて考へるとき此等の現象に C 以外に N_2 の影響を充分に認め得るのである。即ち Fry の狀態圖によれば $Fe-N$ 系は 580°C に共析變態點を有し其の時の N_2 の固溶量は $0\cdot5\% N$ であり、これより常溫の固溶量は $0\cdot015\% N$ まで變化する。然も 50°C 附近の固溶線は傾きが緩かで固溶量の急變を示す。從つて燒鈍温度が 500°C 附近で比較的急冷された場合窒化物は過飽和狀態で存在しこれが時日と共に微粒子として析出し磁氣硬化を表はすのである。此の時電氣抵抗は低下する。此の考へは前の實驗結果と全く符號するのであつて此の冷却條件による變化は N_2 量の含有多き裸棒の場合に最も著しい。これによつて鎔着時の如き不規則な加熱冷却がある場合 500°C より緩冷した場合、空冷した場合等の説明が充分なし得る。

要するに磁氣抵抗も電氣抵抗も鎔接の儘の時に N_2 の固溶量が出来るだけ少いものが適當であつて緩冷が必要な條件である。

$Fe-N$ 系狀態圖と顯微鏡組織及び測定結果より見るに鎔

⁹⁾ 井口、多賀谷 鎔接協會誌 第2卷 第1號 昭和6年11月

接の儘の組織で針狀窒化鐵の存在するものは時効の時に回復期が早く時効による惡化の程度が稍少いに反し針狀窒化鐵の認められない程度のものは時効による惡化が比較的著しく回復に長時間を要する。これは窒化物が析出してゐるものは結晶の存在と同じ理由で固溶體より析出することが比較的容易なのに反し、窒化物が全部固溶されてゐるものは時効期間に至つての析出が比較的困難なるによると思ふ。

然し燒鈍徐冷した場合は窒化物の少いもの程いゝ値を示す。これは抗磁力に著しく明である。

然し乍ら實際問題として鎔接後は燒鈍を行はない場合が多く或は全く不可能のときもある。例へば鎔接される材料が燒鈍を許さない場合、變形とか歪を起す爲に製品として燒鈍されない場合、其の他色々の原因で燒鈍しない場合がある。斯るときに燒鈍を行はずして優れた性質を望むのは獨り電磁氣的性質のみでなく鎔接一般の要求であるが非常に困難な問題である。

電磁氣的性質の場合電氣回路と磁氣回路は別に考へなければならぬ。電氣回路の鎔接には鎔接棒として純粹な裸線或は Si の如き抵抗を著しく増加する元素を含まない薄塗布棒が良好である。磁氣回路の鎔接には履歴損失が小さく誘磁率が大で、電氣抵抗が大なるものが望しく Si , Al , P 等を含むものは此の目的には適するが作業の難易、機械的性質から Si に Mn を加へたものが最も良好である。

實驗結果の示す如く電氣抵抗の大なる點磁氣性質の變化が少い點は Si , Mn を添加したものが斷然良好であり、到底他の元素を加へたものは及ばない。又機械的性質の點から考へても抗張力、延伸率、衝擊値等優秀な成績を示してゐる。

磁氣誘導をよくする爲に Mn を加へたことは著者の試みであるが Mn により脱酸脱窒を行はしめて電弧鎔接に於ける大氣の影響を減じるにある。前述の如く Mn 其自身が磁氣抵抗を減少せしむる效果はない。又一般に結晶粒の大きい方が磁氣性質がいゝに反し Mn を加へたものは變態點の降下或は Mn の性質として結晶粒が小さくなり上記の事實に反する譯であるがこれが有效なる譯は大氣の汚穢が其れ以上に大なる影響があることを示す。

機械的强度が必要なく磁氣的性質のみならば Si , Al を添加し Al より脱酸すれば兩者の效果が相俟つて結晶粒の成長磁氣性質の良化が見られる。然し機械的性質を要求する場合殊に衝撃或は繰返し荷重を受けるものでは磁氣性質

に有效な P , Al を合金元素として用ひることは危険である。 P は非常に量が少い場合は鎔着鐵にいゝ性質を與へるが量が多くなると P と同様非常に脆弱になる。

P を含んだものが針状組織を呈する理由は別に研究を進めてゐるが Vogel の状態圖によれば $0\cdot6\%$ P 以下の時は冷却途中 γ 界域を通る。鎔接で針状組織が表はれる範囲が $0\cdot5\%$ P 位迄であつて其れ以上のときは爐中鎔融した試料と全く同じ組織を呈する。 γ 界域を通る成分の場合も冷却速度によつて鎔接の場合の如き組織になるので γ 界域の析出状態と針状組織の關係が考へられる。即ち含燐試片の針状組織は P の影響であることは明である。

鎔接棒に加へる合金元素の量は元素の種類、作業條件等から定まるのであるが Mn は上記の目的を充す以上に含まねことで鎔着金屬中の Mn 量は $0\cdot5\%$ になる方がいいと思ふ。著者の研究に依れば¹⁰⁾ 塗布棒では芯線に對し $1\cdot5\%$ 青石綿被覆棒では $3\cdot0\%$ を適當と思ふ。

Si は鎔融點を降下させ作業を困難ならしめるので塗布量として芯線に對し 2% 以下が適當である、尤も上述の如く磁氣回路の鎔接には Si の多いものは結果がいゝので被覆剤等が研究され、作業が容易になれば 4% 位まで多い方がいい。 Al , P は作業は容易であるが結果はよくない。 Al 1% 位のものに Mn を加へたものは良好である。

焼鈍を行はない場合時效變化を少くするには窒化物の生成及び固溶量を少くするのが有效でこれには Si , Mn を加へたものが最も適當の様である。然し N_2 が相當にあるものでは寧ろ裸棒鎔接の如く比較的 N_2 量の多いものが時效による變化が少い、原子水素鎔接は熱源が W 電極間の水素中の電弧であり鎔着材は低炭素棒で唯鎔融する程度であるから元素量の變化は水素により脱炭される外殆どない其故高級な仕事に適當し Si を 4% 或は $2\cdot25\%$ を含んだ鎔接棒を以つて最近 Hess 氏が實驗¹¹⁾ してゐるが非常に優秀な結果を得てゐる。然し低炭素棒を用ひて行つた場合著者の實驗結果の如く時效變化が著しいことは注意を要するので出來得れば焼鈍を行ふことが好しい。原子水素鎔接は焼鈍により非常によくなる。

電磁氣的性質より機械的性質を要する場合は市場にある優秀な鎔接棒を用ひた方が作業が容易である。けれども磁

氣性質と機械的性質と共に要求される場合は Si , Mn を加へたものが適當である。

作業の難易経費等の點より考へるに電弧鎔接法は比較的簡単にして経費もかゝらないが Si の多い鎔接棒は種々なる利點はあるが作業の困難なことが最も大なる缺點である此點は製作上及び使用上研究を要する點と思ふ。適量の Mn , Al は酸化發熱して熔融金屬の溫度を上げ鎔込みを充分にするがあまり多くなると沸騰して作業が困難になり鎔接結果も悪くなる。 P を含むものは電流を低くして作業がしやすく熔融金屬の流れもいゝが上述の如く鎔接の目的に適しない。原子水素鎔接は磁氣回路の如き特殊要求に對しては好適の鎔接法にして今後此の方面的鎔接が發達すれば原子水素鎔接法の重要な應用範囲になるだらうと思ふ。然し此の方法使用の時も焼鈍徐冷を行ふか特に Si の多い鎔接棒を用ふることが必要である。

結論

實驗並びに考察の結果を列舉して結論に代へやうと思ふ電弧鎔接法によつて各種の鎔接棒を用ひて鎔着金屬を作り其の電磁氣的性質、機械的性質其の他諸性質の研究を行ひ次の結果を得た。

1. 電氣抵抗の少いことを要する場合例へば第3軌條の鎔接の時等は純粹な鎔接棒を用ひ被覆剤も合金元素を含まないものがいゝ。低炭素裸棒の鎔着金屬は軟鋼材より低い電氣抵抗を有つ。電氣抵抗の大きいことを要する場合例へば磁氣回路の鎔接の時は磁氣的性質と相俟つことを要し著者の實驗範囲に於ては Si と Mn を加へたものが適當である。

2. 磁氣回路の鎔接に於て裸棒或は普通軟鋼用被覆棒による鎔着金屬は軟鋼材に比して著しく磁氣抵抗を増加する鎔接棒に適量の Si , Al , P 等を加へたものは稍磁氣性質を良化するが更に適量の Mn を加へたものは非常に磁氣抵抗を減じ又同時に機械的性質をよくする。但し磁氣性質は Mn に依つて良化されるのでなくて上記の元素と共存する場合に有效である。

3. 機械的性質は電磁氣的性質が専ら必要ない場合は市場にある優秀な鎔接棒を用ひた方が適當である。磁氣性質が要求される場合は Si と Mn を共有する鎔接棒が優秀である。 Al , P 等は鎔接金屬を脆化し衝撃、振動を受ける場所には危険である。但し Al は少量の間は機械的性質

¹⁰⁾ 岡田 前掲(3)

¹¹⁾ W. F. Hess Journal of the American Welding Society Oct. 1933.

をよくする。

4. 添加合金元素の鎔接中の減少は Al が最も多く Mn も大部分失はれ Si の減少は 60~70% なるに反し P は Fe の酸化に對應せず增加傾向を示す。

5. 作業上より見れば Mn , Al の多いものは熔融金屬を沸騰せしむ。 Si の多いものは熔融點が低く鎔接棒端に球を生じ作業が困難である。又珪酸性強き鑛滓を生ずる故に塗布剤に注意を要す。然し Mn を加へれば作業が比較的容易である。

6. 時效試験の結果鎔着金屬は鎔接の儘では相當に時效に依つて磁氣抵抗を増加する。電氣抵抗は僅に減少する。從つて鎔接の儘で磁氣回路に使用した場合は磁氣抵抗の増加を考慮しなければならない。時效に因る磁氣抵抗の増加は N_2 量の多い裸棒鎔接に比較的少く N_2 量の比較的少いものに多い。然し適量の Si を含むもの或は Si , Mn を含むものは殆ど時效により變化しない。

7. 鎔着金屬を 800°C, 500°C, 300°C, で焼鈍したが徐冷したものは鎔接のまゝに比し遙に性質が良好で電氣抵抗、磁氣抵抗共に減少する。然も焼鈍溫度の高い程結果が良好である。

8. 鎔着金屬の加熱後の冷却が磁氣性質に及ぼす影響を

見る爲に 500°C に加熱し徐冷、空冷等を行つた結果 500°C より空冷したものは鎔接の儘より遙に高い履歴損失を示し又 500°C より 160°C まで徐冷し以下空冷したものは全部徐冷したものに比し遙に履歴損失を増し磁氣性質の悪化を示した。此れに依つて比較的低温に於ける冷却速度が非常に重要なことが考へらる。

9. 供試鎔着金屬試験片の中約 20 個につき顯微鏡寫真を提示した。顯微鏡組織と合金の狀態圖及び測定結果より電磁氣的性質の變化に就て冶金學的考察を行つた。

10. 原子水素鎔接法による鎔着金屬に就ても試験した結果低電氣抵抗なる爲には效果がなく電弧鎔接法によつたものより固有抵抗が大である。磁氣的性質は電弧鎔接法に比し遙に良好である。然し低炭素鎔接棒を用ひた場合時效に因る變化が大きい。燒鈍を行へば非常に性質をよくすることが出来る。機械的性質も良好であるが電弧鎔接法に比し経費が多くかかる點が問題である。

最後に本研究をなすに當り種々懇切な御助言を賜つた井口山口兩教授實驗に助力下さつた戸崎富雄氏に深謝致します。又本研究費の一部は日本學術振興會の補助によつたことを記し感謝の意を表する次第であります。

屑鐵輸入及び鋼材生産高激増（1月～4月）

昨年來の鋼材需要漸増を反映して鐵鋼各社の生産能力は年初以來著しく擴大され、本年1月以降4月までの壓延鋼材の生産實績によれば、總生産高は 936,189 t に達し、前年同期の 763,134 t に比し 168,000 t (增加率 2割 1分) の激増を示すに至つたが、更に 5、6 兩月の生産高を本年 4 月中 (258,000 t) と同様と假定すれば本年上半期中の壓延鋼材總生産高は 1,436,000 t に上るものと豫想され、この情勢から推せば本年中の鋼材總生産高は實に 3,600,000 t を突破するものと見られ、昨年中の鋼材總生産高 2,750,000 t (鑄鋼、鍛鋼、特殊鋼をも含む) を遙に凌駕する激増振りである、この反面、製鋼用諸原料の輸入も激増を示しつゝあり、就中銑鐵市價に對する採算關係から輸入屑鐵の需要は特に著しく、本年上半期中の屑鐵輸入高は既に 1,02,113 t と前年上半期の輸入高 455,540 t に比し、3 割以上ノ激増となつてゐるので、斯くては本年中の屑鐵輸入高は優に 1,200,000 t を突破するものと觀測され鐵鋼自給自足の國策的見地からも以上の情勢は頗る注目すべきものとされてゐる、なほ本年上半期中の銑鐵及び屑鐵輸入高の推移は次の如くである（単位 t）。

	銑鐵	屑鐵
1月	10,736	86,143
2月	13,561	105,195
3月	11,304	111,498
4月	8,399	95,946
5月	15,806	103,331
6月(推定)	12,000	100,000
累計	71,809	602,113
昨年上半期累計	69,750	455,540

(中外商業 7月 10日)

印度製鐵業保護關稅勵獎

(同國關稅調查會發表)

【在シムラ三宅總領事 15 日發】さきに關稅調查會において調査中であつたインド製鐵業保護問題に關し今回同會報告書が發表されたが、以上は歐洲諸國品に對抗し印度製鐵業を保護すると共に英國品に對する特惠附與をも加味せる保護關稅を更に 7 年期即ち 1941 年 3 月末まで必要とする旨を述べ保護關稅の改正を勵獎してゐるがその稅率次の如し

△ストラクチュラルセクショ ンス	△ガーバナイズド・シート 英國品 10 ルーピー
英國品 無稅又は收入稅	其 他 40 ルーピー
其 他 トン 43 ルーピー 又は收入稅の中何れか高き 方(以下之に準ず)	△カスト・アイアン・パイプ 英國品 収入稅
	其 他 57 ルーピー 8 ア ンナ
△ペー ー	△ペーブド又はストランデ トセられざるワイヤー類 英國品 25 ルーピー
△ブレイト	其 他 60 ルーピー
英國品 無稅又は收入稅	△其他ワイヤー類及び釘類收 入稅なほ本件に關する政府 の法案は議會開會早々提出 を豫想されてゐる
其 他 25 ルーピー	(中外商業 7月 17日)
△プラック・シート	
英國品 11 ルーピー	
其 他 32 ルーピー	